アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究（10）
―「シエナ会」のプログラムを調査して―

A study of Adolfo Sarcoli's Music Activities (10)
―Focusing on Progams of "Siena-Kai"―

直　江　学　美（人間科学部こども学科教授）
Manami NAOE (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

1911（明治44）年に来日したサルコリは，自宅においてベル・カント唱法で日本人の弟子たちにイタリアオペラのアリアを教え，弟子を海外の有名なオペラ劇場で歌わせることにも成功した。しかし，当時の日本音楽界はドイツ音楽が主流であった。サルコリ門下はイタリア系として「異端者視」されていたという記述もみられる。

本研究では，ドイツ系が主流であった西洋声楽受容期（明治-昭和初期）にイタリア系とされたサルコリおよび弟子たちの会「シエナ会」の演奏会プログラムを調査した。イタリア人作曲家のオペラのアリアを歌い，イタリアに留学したサルコリの弟子たちは，ドイツ音楽が中心であった当時の日本音楽界からは確かに異端な存在であったと思われる。しかしシエナ会に集う若き音楽家たちは，時には「ドイツ系」である東京音楽学校を中退し，「イタリア系」のサルコリから声楽を学んだ。そして演奏会では積極的にイタリアオペラを演奏し，留学先にイタリアを選んでいた。また，サルコリ死去後25年経っても「謝恩音楽会」を開き，サルコリの孫弟子，つまりその次の世代もイタリア系の歌をプログラムに組んでいた。つまり，本研究からはシエナ会の弟子たちはサルコリの存命中も，サルコリの死去後も誇りをもって「イタリア系」の音楽活動をおこなっていたことが示された。

〈キーワード〉
アドルフォ・サルコリ，シエナ会，イタリアオペラ

1　はじめに

1911（明治44）年に来日したサルコリは，自宅においてベル・カント唱法でイタリアオペラのアリアを教え，複数の弟子を海外のオペラ劇場で歌わせることにも成功した。

サルコリの弟子の一人である関屋敏子（1904-1941）について「ドイツ全盛の我樂界から異端者視され[1]」（『国民新聞』1926年8月18日）との記述が見られる通り，ドイツ音楽が中心であった当時の日本音楽界において，ベル・カント唱法でイタリアオペラを歌うサルコリ一門は，イタリア系として非主流派とみられる傾向にあった。

関屋敏子が東京音楽学校を退学したことについて「上野の森を振り捨てイタリーの藝術境にあこがれサルコリー氏の薫陶に[1]」（同上）と表現されたように，イタリア系が楽壇の主流ではないと知りながらも，若い音楽家達はイタリアオペラを学ぶためにサルコリの門を叩いた。そうしてサルコリの元に集まった弟子たちは，1933（昭和8）年にシエナ会を結成する。シエナ会は，主催した音楽会のプログラムで，サルコリを「ベル・カントの父」と呼び，日本にベル・カント唱法を伝えた最初の人物として称えた[2]（直江　2019; 23-30）。

ドイツ系が主流でイタリア系が非主流とされる傾向は音楽家の留学先にもみられる。1922年に海外留学した音楽家10名の留学先は，サルコリの弟子である鉄能子（のちのベルトラメリ能子：1903-1973）がイタリアである以外，全員がドイツである[3]（直江　2018; 25-32）。また，当時の日本音楽界について1930（昭和5）年に堀内敬三（1897-1983）が次のように書いている。

「ドイツ音樂の世界的優越が日本にも波及して日本に於ける公式音樂はすべてドイツ型に依るに至つた。現代日本の教育音樂は何か。ドイツ音樂である。官私立の音樂学校

で研究するものは何か。ドイツ音樂である。演奏會で歌はれ奏せらるゝものは何か。ドイツ音樂である[4]」(『月刊楽譜』1930.2; 33-34)。

シエナ会については『金沢星稜大学人間科学研究』第13巻第1号[2]および2号[5]に，設立の経緯および活動を概観した。本研究では，シエナ会の演奏会プログラムを調査し，当時の日本音楽界と比較するための基本資料とする。

なお，本稿では，シエナ会主催の演奏会を開催順に追い，当時のチラシやプログラムに記載された出演者名，曲名，作曲者名，会場をそのまま転記する。

出演者を（・）で示し（　）は筆者の補筆とする。

2　シエナ会の音楽活動（サルコリ存命中）

2−1　第一回演奏会「シエナ會大演奏會」

「シエナ會大演奏會[6]」
1933（昭和8）年4月28日(金)午後7時開演
明治神宮外苑日本青年館
ピアノ伴奏　エンリコ・ロッシー
・ソプラノ獨唱　船越冨美子
　歌劇「トスカ」歌に活き戀に活き　プツチニ作
　歌劇「お蝶夫人」ある晴れた日に　プツチニ作
・ソプラノ獨唱　小原威子
　歌劇「トラビヤタ」その人は彼か花より花へ
　ヴエルデイ作
・バス獨唱　山田兼雄
　歌劇「ソンナンブラ」あゝ懐かしの故郷　ベリーニ作
　ボルガの船唄　ロシヤ民謠
・ソプラノ獨唱　長島とく子
　歌劇「アイーダ」神よあはれみ給へ　ヴエルデイ作
　歌劇「仮面舞踏會」驚き給はん　ヴエルデイ作
・ソプラノ獨唱　石井靖子
　歌劇「ラワリー」私は遠くへ行かねばならぬ
　カタロニ作
　歌劇「ジヤニスキツキ」お父さん赦して　プツチニ作
・ソプラノ獨唱　橋本花子
　歌劇「カヴアレリア　ルステイカーナ」ママも知る通り
　マスカニ作
・ソプラノ獨唱　服部貞子
　歌劇「ロメオとジユリエツト」ワルツソング　グノー作
・バス獨唱　山田兼雄
　歌劇「ドンカルロ」吾王者の如く眠らん　ベルデイー作
・ソプラノ獨唱　阿南しのぶ
　歌劇「トラビヤタ」さらば　ベルデイー作
　セレナーデ　トステイ作
・ソプラノ獨唱　橋本花子
　歌劇「パリアツチ」鳥の唄　レオンカバルロ作
・ソプラノ獨唱　青木晴子
　歌劇「ミニヨン」　トーマー（ママ）作
　ラパロマ　イルヂエル作
　ラスパニヨラ　デイキアラ作
・ソプラノ獨唱　船越冨美子
　歌劇「アイーダ」早やふるさとの　ベルデイー作
・ソプラノ獨唱　小原威子
　歌劇「ハムレツト」オツフェリヤ狂亂の歌　トーマ作

2−2　第二回演奏会「謝恩大演奏會」

「謝恩大演奏會[7]」
1933（昭和8）年12月5日
大阪朝日會館[9]
・ソプラノレヂエロ　広瀬勝代
・メツオソプラノ　井上起久子
・テノール　大津賀八郎
・寶塚交響樂團指揮者　竹内平吉
・ソプラノリリコ　寺澤民子
・フリユート　川口勝二郎
・テノール　ボナビタ
・ピアノ　チエカレリー
ラ・トスカより　“歌に活き戀に活き”
フアヴオリタより
ルチア・ラムメルムーアより　“狂亂の歌”
ラ・ボエームより
ラ・トラビアタより　“あゝそは彼の人か”

2−3　第三回演奏会「第二回シエナ會聲樂大演奏會」

「第二回シエナ會聲樂大演奏會[8]」
1934（昭和9）年4月20日(金)午後7時開演
青山神宮外苑日本青年館
ピアノ伴奏：エンリコ，ロシイー氏，灰田友紀子氏
フルート助奏：岡村雅雄氏
・船越富美子
　歌劇　メフイストフエレ　プツチーニ作
・鈴木末子
　歌劇　ラ，ボエーム　妾はミゝと呼ぶ　プツチーニ作
・ワイテイング鈴子
　歌劇　蝶々夫人　或る晴れた日　プツチーニ作
・大津賀八郎
　歌劇　ラ，ボエーム　冷たき手　プツチーニ作
・寺脇さわ子
　歌劇　小夜樂　トゼツリ作
・山田兼雄
　シモンボツカネグラ　ヴエルデイ作
・長島德子

歌劇　リゴレット
祭日毎に
懐かしい名
ヴエルデイ作
・石井靖子
歌劇　カルメン　ミカエラのアリヤ　ビゼー作
・宮崎妙子
歌劇　トスカ　藝術と愛に活き　プツチーニ作
・竹田友紀子
歌劇　ラ，ワリー　遠くへ行く　カタラニ作
・小原威子
歌劇　ラクメ　鐘の歌　レヲ，ドリーブ作
・宮崎妙子
歌劇　サムソンとデリラ　サン.サーン作
・阿南しのぶ
歌劇　ルクレチア，ボルジャ　ドニゼツテイ作
歌劇　聽け雲雀の聲を　ビシヨツプ作
・山田兼雄
ナイル河　ルロー作
バツカナーレ　イラデイエル作
・本多花子
歌劇　トロバトーレ　ヴエルデイ作
歌劇　ラ，パロマ　イラデイエル作
・大津賀八郎，船越ふみ子
歌劇　椿姫　二重唱　ヴエルデイ作
歌劇　トウランドツト　プツチーニ作
・井上ケイ子
歌劇　ノルマ　ベルリーニ作
・竹田友紀子
歌劇　ラジヨコンダ　ポンキンエーリ作
・小林千代子
出發　アルヴアレ作
みそさゞゑ　ヴエネデイクト作
・三上孝子
歌劇　ランメルムアーの花嫁
（第三幕ルチア姫狂亂の場）　ドニゼツテイ作
・本多花子
歌劇　椿姫（そは彼の人か）　ベルデイ作
歌劇　ドリゴのセレナーデ　ドリゴ作
・神保悦子
歌劇　トスカ（愛と歌に）　プツチニ作
・ワイティング鈴子
歌劇　夢遊病の女　ベリニ作
歌劇　ラ，スパニヨラ　キアラ作
・寺脇さわ子
歌劇　ラワリー　遠くへ行く　カタラニ作
歌劇　椿姫　乾杯の歌　アルデイテ作
・三上孝子
歌劇　聯隊の娘　ドニゼツテイ作
歌劇　パルラ　語り給へ　アルデイテ作
・井上ケイ子
歌劇　デイノラ　影の歌　マイエルベール作
・長島德子
歌劇　フアウスト　寶石の歌　グノー作
・石井靖子
歌劇　パルテイダ　アルバレス作
・阿南忍
ベニスの謝肉祭　ベネデクト作
ラ，パロマ　イラデイエル作
・小林千代子
歌劇　ラクメ　鐘の歌　レオドリーブ作
・小原威子
歌劇　夢遊病の女　澄み渡りたる今日の日よ　わが胸に御手を置き給はば　ベリン作
・廣瀬勝代
プロツホのヴアリエーシヨン　プロツホ作
みそさゞえ　ベネデイクト作
・關屋敏子
歌劇　ハムレツト　トーマ作
歌劇　聽け雲雀の聲を　ビシヨツプ作
歌劇　お夏狂亂　關屋敏子作
歌劇　お蝶夫人　プツチニ作

2－4　第四回演奏会「第三回シエナ會聲樂大演奏會」

「第三回シエナ會聲樂大演奏會[9]」
1935（昭和10）年3月20日（水）午後7時開演
（3月22日（金）開催日のチラシもあり[10]）
明治神宮外苑日本青年館
伴奏者：灰田友紀子，宮崎富子，マルガレツト，チムト，ワイティング，キヤスリン，高木和夫
フルート助奏：岡村雅雄氏
山葉グランドピアノ使用

2－5　音楽活動のまとめ

1933（昭和8）年に結成したシエナ会が，サルコリ存命中に開いた演奏会は次の4回であった。

「シエナ会大演奏会」
1933（昭和8）年4月28日（金）午後7時開演
明治神宮外苑日本青年館
「謝恩大演奏会」
1933（昭和8）年12月5日
大阪朝日会館

「第二回シエナ会声楽大演奏会」
　1934（昭和9）年4月20日（金）午後7時開演
　青山神宮外苑日本青年館
「第三回シエナ会声楽大演奏会」
　1935（昭和10）年3月20日（水）午後7時開演
　明治神宮外苑日本青年館

1933（昭和8）年12月5日に大阪朝日会館で開催された演奏会のみ「謝恩大演奏会」であり，それ以外は，「シエナ会大演奏会」として第一回から第三回まで開催数が加えられている。「謝恩大演奏会」もプログラムにシエナ会の名前が明記されている。

1933（昭和8）年頃に，心身ともに衰弱をみせるサルコリに対して，弟子たちが感謝の意を示す「謝恩音楽会」を開きたいと申し出たが，サルコリは「謝恩音楽会」の開催を固辞していた。しかし，弟子の熱意に押されたサルコリは「門下生の温習会ならやってよい」という許しを出したという経緯がある[(2)(11)]。「シエナ会大演奏会」と表記されているのはそのためである。

一方，大阪で1933（昭和8）年12月に開催された「謝恩大音楽会」には，「謝恩」が明記されている。この音楽会については，『金沢星稜大学人間科学研究』第13巻第1号に「関西在住のサルコリ門下によって，大阪の大阪朝日会館で開かれたようである。翌年1934（昭和9）年4月にシエナ会が行った演奏会が『第二回』となっていることから，この関西在住者によって開かれた『謝恩演奏会』は，シエナ会主催の正式な演奏会にはカウントされず，あくまでも弟子の一部によって開かれた演奏会という意味合いが強かったとも推測される[(2)]」と記した。しかしその後の調査で，サルコリの大阪の弟子，広瀬勝代（1895-1984）が中心となって企画，運営した可能性が高いことがわかった。広瀬は，後に芦屋市婦人会長，日本赤十字社常任理事，日本ユネスコ協会連盟理事などを歴任した芦屋の有力者である。声楽家を志すためではなく，趣味としてサルコリに教えを受ける一方で，サルコリを支える存在でもあったと思われる。

シエナ会が開催した4回の音楽会のプログラムを並べると，プッチーニ，ヴェルディ，マスカーニ，レオンカヴァッロなど，イタリア人作曲家が作曲したイタリアオペラのアリアが並ぶ。特に1回目は大曲が多く，プログラムから弟子たちの意気込みが伝わる。

また，「謝恩大音楽会」では，出演者の声種を，ソプラノレヂエロ（ソプラノレッジェーロ），ソプラノリリコと表記している。日本で，レッジェーロやリリコまで記載しているのは稀である。サルコリは，弟子たちの声を，ソプラノやアルトではなく，レッジェーロやリリコなど，さらに細かく見極め，声にふさわしい曲を与えていたことがわかる。

3　弟子の音楽活動（サルコリ死去後）

3−1　第五回演奏会「故ア・サルコリー先生謝恩大演奏會」

「故ア・サルコリー先生謝恩大演奏會[(12)]」
1936（昭和11）年5月4日（月）午後6時開演
日比谷公會堂　入場料：1円・2円
伴奏者：エンリコ・ロッシー，灰田友紀子，林良夫，カスリーン・ワイテング，多部三郎，宇佐・ダリオ，宮崎富子
　山葉コンサートグランド使用
・シエナ會一同　合唱「アヴエマリア」 グノー作
　伴奏：慶應義塾マンドリン倶樂部　　指揮：服部正
・服部都代子
　歌劇「リゴレット」新しき御名　ヴエルデイ作
・鈴木万惠子
　歌劇「ラ・ボエーム」ムゼツタ　プツチーニ作
・鈴木敏子
　歌劇「トロヴアトーレ」平穏なる夜　ヴエルデイ作
・神保悦子
　歌劇「カヴアレリア，ルステイカーナ」
　ママも知る通り　マスカーニイ作
・ワイテイング鈴子
　歌劇「ラ・ボエーム」ミミの唄　プツチーニ作
・寺脇さわ子
　歌劇「椿姫」あゝそは彼の人か　ヴエルデイ作
・船越富美子
　歌劇「アイーダ」勝ちてかへれ　ヴエルデイ作
・大矢ふみ子
　歌劇「ラ・トラヴイアタ」花より花へ　ヴエルデイ作
・後藤花子
　「アイ・アイ・アイ」 オスマン・ペレツス作
・遠藤衢邇子
　歌劇「ラ・ジヨコンダ」自殺　ポンチエリー作
・田中常彦　特別出演（マンドリン獨奏）
　小夜曲「月に寄せて」（無伴奏） サルコリー作
・小原威子
　歌劇「オテロ」(ｲ) 柳の歌　ヴエルデイ作
　歌劇「オテロ」(ﾛ) アヴエ・マリア　ヴエルデイ作
・德永晴子
　歌劇「パリアツチ」鳥の唄　レオンカヴアルロ作
・長島德子
　歌劇「デイノラ」影の歌　マイエルベヱル作
・山田兼雄
　「夢遊病者」 ベリーニイ作
　「空想」 ホーレ作

・阿南忍
歌劇「ミニオン」のボロネーズ　トーマス作
・石井靖子
歌劇「カルメン」ミカエラの歌　ビゼー作
・井上けい子
歌劇「ブリターニ」清教徒より　ヴエリーニ作
・三上孝子
「四月」　トステイ作
「マノンレスコー」　プツチーニ作
・慶應義塾マンドリン倶樂部　　指揮：服部正
「海の組曲」アマデイ作
A，ナアイアーデイのセレナーデ
B，オンデイーネの踊り
C，シレーネの歌
D，トリトーニの駄足
・佐藤千夜子
歌劇「トスカ」愛と歌　プツチーニ作
・渡邊光
歌劇「マノン」夢の唄　マスネー作
・關屋敏子
歌劇「ルチア」狂亂　ドニゼツテイ作
「別れの曲」　シヨパン作
・奥田良三
「さらば」　トステイ作
「ニーナの死」　ペルゴレスイ作
・原信子
歌劇「ルイザ」　シヤーペンテイエル作
・三浦環
歌劇「マダムバタフライ」
A　いとしき我が子よ　プツチーニ作
B　或る晴れた日　　プツチーニ作

3－2　第六回演奏会「サルコリー先生17年追悼音樂會」

「サルコリー先生17年追悼音樂會[13]」
1952（昭和27）年6月6日（金）午後6時
日比谷公會堂
會員券（税共）A券　300円　B券　200円　C券　100円
・今泉威子　ピアノ：Miss Ward
海邊にて　Mac Dowell作
母の教え給いし歌　Dvorzank（ママ）作
・五月麗子　ピアノ：灰田友紀
歌劇「椿姫」より，乾盃の歌　Verdi作
歌劇「ボツカチオ」より，戀はやさし　Suppe作
・鈴木基乃　ピアノ：石濱和子
歌劇「ルチア」より，狂亂の歌　Donizetti作
歌劇「ラ・ボエーム」より，ミミの歌　Puccini作
・遠藤伊津子（伴奏者の記載なし）
歌劇「トスカ」より，歌に生き愛に生きPuccini作
歌劇「ボエーム」より，ムゼツタのワルツ
Puccini作
・宮崎妙子（伴奏者の記載なし）
アラ　Chadwick作
ウワツツ　イン ゼ エイア トラデイー　Eden作
・寺脇さわ子　ピアノ：畑末野
歌劇「椿姫」より，あゝそはかの人か――花より花に
Verdi作
ホーム スキート ホーム　Bishop作
・丸山德子　ピアノ：灰田友紀
スパニヨーラ　Chiara作
ミネトンカの湖畔　Lieurance作
・井上けい子　（伴奏者の記載なし）
歌劇「フライツユツツ」より，
アガーテのアリア　Weber作
歌劇「ノルマ」より，天の女王　Bellini作
・船越玲子　ピアノ：藤井肇
すみれ　Scarlatti作
アリエツタ　Pergolesi作
タランテツラ　Tedesco編曲作
せつぶん草　中田喜直作
・阿南忍　ピアノ：松本二郎
ジアニ スキツキ　Puccini作
アレルヤ　Mozart作
・慶應義塾マンドリン倶樂部　　指揮：服部正
歌劇「セヴイリアの理髪師」序曲　Rossini作
・青木晴子　ピアノ：灰田友紀
歌劇「ジヨコンダ」より，Puccini作
イタリー民謡「海に来れ」　Capua作
・川崎豊（川島仟;1894-1990）（伴奏者の記載なし）
歌劇「お蝶夫人」より，花のかくれ家　Puccini作
歌劇「リゴレツト」より，あれもこれも　Verdi作
・柏熊君子　ピアノ：爪生千重
歌劇「ルチア」より，靜寂に　Donizetti作
遙かなる者　Respighi作
・湯山光三郎　ピアノ：藤井肇
歌劇「アルルの女」より，
フエデリーコの嘆き　Cilea作
ロリータ　Peccia作
・ベルトラメリー・能子
ペトラルカの三つの短詩
―貴婦人ラウラの死によりて―　Pizetti作
・原信子　ピアノ：大島正泰
歌劇「お蝶夫人」より，

ある晴れた日に，いとしき坊や　Puccini作

3−3　第七回演奏会「ア・サルコリー先生25周年追悼音楽会」

「ア・サルコリー先生25周年追悼音楽会[14]」
1962（昭和37）年7月8日(日)
イイノホール
・今泉威子　伴奏：野田量子
　歌劇「オルフェオとエウリディーチェ」より
　いとしきエウリディーチェ　グルック作
・岡野亮子（丸山徳子門下）　伴奏：丸山歌子
　歌劇「トスカ」より　歌に生き恋に生き
　プッチーニ作
　アヴェ・マリア　ルッチ作
・山口径子（井上けい子門下）　伴奏：松本和子
　歌劇「ラ・ボエーム」より　ムゼッタのワルツ
　プッチーニ作
　歌劇「パリアッチ」より　鳥の唄　レオンカヴァルロ作
・鈴木基乃　伴奏：畑末野
　麦打ちの唄　サデロ作
　別れの曲　ショパン作
・寺脇さわ子　伴奏：畑末野
　歌劇「椿姫」より　あゝそは彼の人か　ヴェルディ作
　歌劇「椿姫」より　花より花へ　ヴェルディ作
・小林伸江　伴奏：灰田友紀子
　歌劇「蝶々夫人」より　ある晴れた日に　プッチーニ作
　歌劇「蝶々夫人」より　可愛いい坊や　プッチーニ作
・広瀬勝代
　あいさつ
・藤原義江（曲未定）
・原信子　伴奏：野田量子
　歌劇「ラムメルムーアのルチア」より　狂乱の歌
　ドニゼッティ作
・慶応義塾マンドリン・クラブ　指揮：服部正
　序曲「レナータ」 ラヴィトラーノ作
　歌劇「カヴァレリアルスチカーナ」より　間奏曲
　マスカーニ作
　「ブルーダニューブ」 J・シュトラウス作

3−4　音楽活動のまとめ

サルコリ死去後に弟子たちが開いた演奏会は次の3回であった。

「故ア・サルコリー先生謝恩大演奏會」
　1936（昭和11）年5月4日(月)午後6時開演
　日比谷公會堂
「サルコリー先生17年追悼音樂會」
　1952（昭和27）年6月6日(金)午後6時開演
　日比谷公會堂
「ア・サルコリー先生25周年追悼音楽会」
　1962（昭和37）年7月8日(日)午後1時半開演
　イイノホール

3回の演奏会のうち，1952（昭和27）年におこなわれた「サルコリー先生17年追悼音楽會」の主催はシエナ会ではなく，サルコリー先生追悼音楽会実行委員会，マネージメント・音楽新聞社であった[14]。しかし，これまでのシエナ会主催の音楽会同様，出演しているのはサルコリの弟子たちであり，この「サルコリー先生17年追悼音楽會」もシエナ会の音楽活動とする。

シエナ会は，サルコリ死去後2ヶ月で「故ア・サルコリー先生謝恩大演奏會」を開催した。生前はサルコリが固辞した「謝恩音楽会」であるが，死去後は門下生一同が恩師サルコリへの感謝を示す「謝恩演奏会」として開催した。謝恩音楽会は，これまでに見られなかった全員合唱から始まり，25名が次々とイタリアオペラのアリアを中心に歌唱をおこなった。佐藤千夜子（1897-1968），関屋敏子（1904-1941），奥田良三（1903-1993），原信子（1893-1979），三浦環（1884-1946）ら当時のスターたちも舞台に立った。1936（昭和11）年は佐藤千夜子（39歳），関屋敏子（32歳），奥田良三（33歳），原信子（43歳），三浦環（52歳）になる年である。これからの声楽界を担う年齢にさしかかった歌い手たちである。

歌の他に，慶應マンドリンクラブを創部した田中常彦（1890-1975）が，サルコリ作曲「月に寄せて」をマンドリン独奏している（田中は46歳）。また，慶應義塾マンドリン倶樂部（指揮：服部正　1908-2008）のマンドリン合奏もおこなわれた（服部は28歳）。

追悼音楽会は，サルコリ死去17周年と25周年の2回おこなわれた。1962（昭和37）年に行われた「ア・サルコリー先生25周年追悼音楽会」では，サルコリの直弟子の出演者数は6人と少ないが，原信子，慶應義塾マンドリンクラブに加えて，藤原義江（1898-1976）も出演した。また，サルコリの孫弟子も出演した。サルコリの弟子のさらに次の世代が育っていることがわかる。

サルコリの弟子たちが集った演奏会は，1962年の「ア・サルコリー先生25周年追悼音楽会」を最後に，その後は開催したという記録は見つけられなかった。弟子のうち，関屋敏子は1941（昭和16）年に，三浦環も1946（昭和21）年に死去している。また，「ア・サルコリー先生25周年追悼音楽会」がおこなわれた1962（昭和37）年は，サルコリに直接教えを受けた弟子たちも，佐藤千夜子（65歳），奥田良三（59歳），原信子（69歳），藤原義江（64歳）という年齢になっていた。

写真1「ア・サルコリー先生25周年追悼音楽会」集合写真（サルコリの遺影を持つのが広瀬勝代,前列左から2人目は藤原義江,4人目は原信子）（丸山洋子氏提供）

弟子の中でも，子供の頃からサルコリの家に住み込み，サルコリの身の回りの世話をしながら声楽のレッスンを受けていた丸山徳子（1911-2014）でも1962年には51歳になっており，追悼音楽会には弟子が出演した。また，サルコリの存命中に「謝恩大音楽会」を開催した大阪の弟子，広瀬勝代（67歳）は歌ではなく「あいさつ」で参加した。このようにサルコリに直接教えを受けた弟子たちも高齢になっていたが，それでも，恩師であるサルコリのために追悼演奏会を開催した。

舞台に立って歌った原，藤原は60歳を超え，サルコリ死去時には28歳だった服部も54歳である。音楽会当日に会場で配られたプログラムには，原信子が「私がオペラを志したのもこの先生のおかげでした　もう歌ってくださるサルコリー門会の数もすくなくなりました。この二十五年目最後の追悼演奏会に，第一番目の弟子，私は，どうしても歌わなければならないでしょう[14]」と寄稿している。

プログラム中には「サルコリー先生門下の人々」と題して次のように記されている。

「サルコリー先生門下の主な人々を紹介すると，本日の音楽会に出演している人々，今泉威子，井上けい子，小林伸江，丸山徳子，寺脇さわ子，鈴木基乃，原信子，広瀬勝代氏らは申す迄もないが，本日の催しに発起人としてご協力頂いたベルトラメリ能子，松山芳野里，奥田良三，湯山光三郎，山田兼雄，柏熊君子，船越玲子，下田忍子，神保悦子，今野貞子，篠原彗子，若林文，それに牛山充，小松耕輔，エンリコ・ロッシー，藤原義江，服部正氏にも発起人として，たいへんお世話になりました。

また，城多又兵衛，田谷力三，渡辺光，佐藤千夜子，三上孝子，喜波貞子，勝田保世，川崎豊，深沢輝，江崎英一郎，大津賀八郎氏，すでに故人となられた　プリマドンナ三浦環，関屋敏子女史等，サルコリー先生ゆかりの人々は数多い[14]」

「二十五年目最後」で企画されたシエナ会の演奏会プログラムに，出来るだけ多くのサルコリ関係者の名前を記載したようにも感じる。

これら，サルコリゆかりの人々のうち，藤原義江，喜波貞子，原信子，ベルトラメリ能子，奥田良三，関屋敏子，川崎豊，佐藤千夜子，城多又兵衛，は1920年から1930年代初頭にかけてイタリアに留学している。三浦環の留学先はドイツであったが，イタリアオペラの代表的な作曲家，プッチーニ作曲の歌劇《蝶々夫人》のお蝶夫人役で世界各地の舞台で多くの出演を重ねた。

1920年から1930年代初頭といえば，前述した通り，1922年に海外留学した音楽家10名の留学先は，サルコリの弟子である鉄能子（のちのベルトラメリ能子：1903-1973）がイタリアである以外，全員がドイツであった[3]。また，1930（昭和5）年に堀内敬三が日本音楽界について「ドイツ音樂の世界的優越が日本にも波及して日本に於ける公式音樂はすべてドイツ型に依るに至つた。現代日本の教育音樂は何か。ドイツ音樂である。官私立の音樂学校で研究するものは何か。ドイツ音樂である。演奏會で歌はれ奏せらるゝものは何か。ドイツ音樂である[4]」と表している。当時の日本音楽界はそのような状況であった。

これらの時代背景に鑑みても，シエナ会の演奏曲目および留学先は，「イタリア系」として当時の日本音楽会とは異なることが明らかである。「異端者視」される一方で，シエナ会も「イタリア系」として，積極的にイタリアオペラのアリアや歌曲を中心とした音楽活動をおこない，留学先にイタリアを選んでいた。

4　おわりに

本研究では，ドイツ音楽が主流であった西洋声楽受容期（明治期－昭和初期）にイタリア系とされたサルコリの弟子たちの会「シエナ会」の演奏会プログラムを調査した。

日本における公式音楽はドイツ音楽であり，演奏会で歌われるのはドイツ音楽[4]といわれた1930年頃の日本にあって，シエナ会のプログラムは，イタリア人作曲家のオペラのアリアが主であった。また，留学先といえばドイツであった時代に，サルコリ門下は次々とイタリアに留学していた。

これらは，ドイツ音楽が中心であった当時の日本音楽界からは確かに異端な存在であったと思われる。しかしシエナ会に集う若き音楽家たちは臆することなく，時には「ドイツ系」の東京音楽学校を中退し，「イタリア系」のサルコリから積極的に声楽を学び，演奏会では積極的にイタリアオペラを演奏し，留学先にイタリアを選んでいた。

また，シエナ会はサルコリ死去後25年経っても「謝恩音楽会」を開き，サルコリの孫弟子，つまり弟子の次の世代

も歌劇《トスカ》や歌劇《ラ・ボエーム》などイタリア系の歌を歌った。つまり，本研究では，シエナ会の弟子たちはサルコリの存命中も，サルコリの死去後も，誇りをもって積極的に「イタリア系」の音楽活動をおこなっていたことが示された。

〔本研究は，文部科学省より科学研究費：基盤研究（C）（21K00238）の助成を受けたものである〕

引用文献

⑴ 『国民新聞』1926「自ら作曲の俚謠獨唱」。8月18日付，8面。
⑵ 直江学美 2019「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(6)」。『金沢星稜大学人間科学研究』第13巻第1号，23-30頁。
⑶ 直江学美 2018「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(4)」。『金沢星稜大学人間科学研究』第12巻第1号，25-32頁。
⑷ 堀内敬三 1930「建設の時期到れども」。『月刊楽譜』第19巻第25号，33-34頁。
⑸ 直江学美 2020「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(7)」。『金沢星稜大学人間科学研究』13巻第2号，33-38頁。
⑹ プログラム　1933a「シエナ會大演奏會」。（シエナ会）1933年4月28日
⑺ プログラム　1933b「謝恩大演奏會」。（シエナ会）1933年12月5日
⑻ プログラム　1934「第二回シエナ會聲樂大演奏會」。（シエナ会）1934年4月20日
⑼ プログラム　1935a「第三回シエナ會聲樂大演奏會」。（シエナ会）1935年3月20日
⑽ チラシ　1935b 「第三回シエナ會聲樂大演奏會」。（シエナ会）1935年3月20日
⑾ 『東京朝日新聞』1933「孤獨に氣も弱るわが樂壇の父」。4月27日付，5面。
⑿ プログラム　1936「故ア・サルコリー先生謝恩大演奏會」。（シエナ会）1936年5月4日
⒀ プログラム　1952「サルコリー先生17年追悼音樂會」。（シエナ会）1952年6月6日
⒁ プログラム　1962「ア・サルコリー先生25周年追悼音楽会」。（シエナ会）1962年7月8日